

## 保育者養成における総合表現の実践力習得のための クロスカリキュラムを用いた授業内容の検討

著者	智原 江美, 鍋島 恵美, 和田 幸子, 田中 慈子
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究 紀要
号	55
ページ	225-236
発行年	2017-12-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000862/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000862/</a>

# 保育者養成における総合表現の実践力習得のための クロスカリキュラムを用いた授業内容の検討

智 原 江 美  
鍋 島 恵 美  
和 田 幸 子  
田 中 慈 子

## I はじめに

子どもの表現は生活に密着した総合的なものであり、その表現を適切に受けとめ健やかに育むためには、保育者自らの感性を常に磨こうとする努力と共に、子どもとの暮らしの中で共に学びあって高め合う姿勢が重要である。筆者らは保育者養成校学生の総合表現の実践力育成を目的とし、「保育者養成にける領域『表現』へのクロスカリキュラム導入」に関する研究\*の一環として、平成26年に「幼稚園・保育所における『表現』領域の活動に関する調査」を実施し、本学紀要第53号<sup>注1)</sup>においてその結果を報告した。続いて「保育者養成校における『表現』領域の授業にかかわる調査」を実施し、本学紀要第54号<sup>注2)</sup>においてその結果を報告した。

これら二つの調査により、保育者を目指す学生が感性を磨き、総合的な表現力を工夫し実践できる能力を養うような授業プログラムの開発が必要となる結果が得られた。これまでの養成校の多くの授業では、各々の領域ごとに、音楽表現、造形表現、身体表現、言葉の表現の授業が独立して実施されているが、保育現場では子どもの表現活動は単独の領域で構成されるものではないことから、表現に結びつくそれぞれの領域を連携させた活動を学生時代に経験することが非常に重要であると筆者らは考えた。

そこで、平成27年の本学こども教育学部設立時に上記の4つの表現領域うち2領域ずつを連携させた科目及び4領域を連携させた科目をカリキュラムに設けた。「造形表現」と「身体表現」を連携させた科目を「総合表現Ⅰ」、「音楽表現」と「言葉表現」を連消させた科目を「総合表現Ⅱ」とし、これらを2年次後期開講科目(平成28年後期)として計画し、実践した。また、

4領域全てを連携させた「総合表現Ⅲ」の科目についても4年次科目(平成30年前期)として計画している。「総合表現Ⅲ」の開講に先立ち、平成27年度後期、本学短期大学部こども保育学科2年次後期科目として開講した「保育実践演習」においても総合表現をテーマとして取り上げ、表現の4領域を連携させた活動に取り組んだ<sup>注3)</sup>。

本稿ではクロスカリキュラムを用いたこれら2領域ずつの連携および4領域を連携させた総合表現の授業を実施するための授業計画の検討と実践後の振り返りを行い、養成校学生の感性や総合表現能力育成のための授業計画の提案と今後に向けての課題・展望について報告する。

## II 保育現場へのアンケート調査結果の概要

本学紀要第53号において既に報告したが、幼稚園・保育所を対象として実施した表現活動におけるアンケート調査(平成26年10月に京都府南部の幼稚園・保育所200カ園を対象として郵送方式で実施、回収率34.5%)では以下のことが明らかとなった。

実際の保育現場では表現領域を連携させた多様な表現活動が行われており、クロスカリキュラムによる授業展開が保育者志望の学生にとって実践的な学びにおいて有益であると考えられる。園での表現活動としては音楽表現と言葉表現の活動は連携させて実施されていることが多く見られたが、造形表現活動は単独で実施されていることが多く、他の表現活動との連携が弱いことがわかった。また、保育者は表現活動を実施する際、幼児自らの主体的な取り組みや自由な発想を受け止めつつ、「楽しむ」ことに重点を置いていることが明らかとなった。そして、保育現場では保育者の資

質として「豊かな感性」が非常に重要であるとしている。知識・技能としてあげられた必要な事柄を表現領域別にみると、音楽表現領域では「弾き歌い」が、造形表現領域では「自然・色・形・感触・イメージ等に親しむ体験」が、身体表現領域では「身体活動を伴った遊びの体験」が、言葉の表現領域では「コミュニケーション能力」が重要であるとされた。以上に加えて、保育者は子どもの表現の内にある表現の心象に触れた瞬間に表現活動に面白さを感じており、それゆえに子どもの発達に即した指導力の重要性を指摘している。

さらに、表現活動を実施するにあたり養成校学生には「感性」「子ども理解」「領域の総合性の理解」が求められている。これらを習得するには大学の学びに加えて日頃から芸術や自然環境に触れる機会を持つことやボランティアなど実践現場での保育体験が重要と考えていることがわかった。

### Ⅲ 保育者養成校へのアンケート調査結果の概要

本学紀要第54号において既に報告したが、全国の保育者養成校を対象として実施した表現活動におけるアンケート調査（平成28年2月に全国の幼稚園教諭・保育士養成課程を保有する国立・公立・私立の大学・短期大学・専門学校計200校を対象として郵送方式で実施、回収率27.5%）では以下のことが明らかとなった。

今回の保育者養成校へのアンケート調査の回収率は27.5%と低く、回収率からだけでは一概には判断できないが、総合的な表現活動に関心のある表現領域科目担当者はまだ少ないと考えられた。特に大学の科目担当者からの調査用紙の回収率は15.7%と低かった。

得られた回答からは領域を重視した授業内容には二つの捉え方があることが推測された。第一は、ミュージカル・オペレッタのような総合芸術としての取り組みである。これらの創作と上演は学生の協同的な活動の体験、グループダイナミズムの実践などの意図をもって様々な工夫をされながら実施されてきている。これらは養成校学生として経験することは意味のある活動と言えるが、子どもの総合的な表現活動としてはもっと多様な取り組みが考えられた。

第二は各領域の活動要素を意図的に取り出し、そこに他領域の活動を掛け合わせて経験させるものであつ

た。例えば音に耳を傾け色や筆圧を変えて描くというような、音色に対しての感性を豊かにするというものである。これは学生の感性を高め、多様な表現方法を探る体験となる。また、心の動きのままに表現する幼児への理解を深める機会ともなる。得られた回答例として多くはなかったが、総合的な表現活動を意識した活動に取り組んでいる事例も見られ、その中では音楽表現と重複させた活動がもっとも多かった。このことから、音楽表現担当教員がどの程度他の表現領域の教員と連携して総合的な表現活動が実施できるか、また、他の領域からの連携の取り組みに対応できるかが大きな鍵となると考えられた。

養成校教員として考える「保育者との資質として重要な事柄」、「授業実施において大切にしていること」として「感性」がもっとも重要と考えていた。しかし、「感性」は在学中の表現領域の授業のみで習得できるものではない。個々の学生の生育環境や経験の違いにより、「感性・創造性」には大きな差がある。とりわけ近年の創造的な活動に主体的に取り組めない学生が増加する傾向のなか、感性豊かな保育者を育てるための授業内容に関してのさらなる工夫や教授技術の研鑽が必要と考えられた。その一つの授業の工夫として有効なことは、学生が取り組んだ表現活動を子どもに見せる機会を持つことであると考えられている。つまり、学生にとっては、その経験が、自らの取り組みを振り返り自己評価となることや、直接子どもの反応を感じられることから、幼児理解の重要性を体得できることは、次への表現活動の意欲と工夫する能力へとつながっていくことになるといえよう。そして授業で「習得してほしい内容」として最も多く挙げたのは「教材を作成・活用する能力」であり、そこに繋がっていくと考えられる。

### Ⅳ 実践力を養うためのクロスカリキュラムを用いたモデル授業計画の検討と実践

上記の保育現場と養成校へのアンケート結果を踏まえ、学生が表現領域を重複させた活動を体験できるよう、クロスカリキュラムを用いた授業科目、内容を検討した。

1. 2領域を連携させた活動「総合表現Ⅰ」の取り組み

「総合表現Ⅰ」として「造形表現」と「身体表現」を、「総合表現Ⅱ」として「音楽表現」と「言葉表現」の2つの表現領域を重複させた科目を計画し、実施した。それぞれの授業計画及び実施の状況を以下に示す。

いずれも平成28年度後期2年生(60人)対象である。

(1) 授業概要

「造形表現」と「身体表現」を連携させた「総合表現Ⅰ」の授業概要を表1に示す。

(2) 授業展開と課題

造形表現<sup>注4)</sup>と身体表現を連携させた一連の活動は、「動く身体に興味を持つ」というテーマで取り組んだ。造形表現ではダンボールという素材の特性を活かして動く仕組みのある動物を制作し、身体表現では擬態語・擬音語、色などを動きで表す経験をしたのち、イメージを膨らませながら体で動物を表現した。また、ボール、新聞紙、プレイクロス、リボン、綿などの素材の性質をとらえて表現する活動にも取り組んだ。これらを幼稚園3歳児を対象に発表し、一緒にさまざまな動

表1. 「総合表現Ⅰ」授業計画

▶ 授業の概要 子どもの活動は各領域の活動が単独でなされるのではなく、その多くは様々な領域の活動が合わさって総合的な活動としてなされる。保育者として子どもの表現を受けとめ、また適切な教材を提供できるような知識・技能の習得が必要である。本科目では身体表現活動と造形表現活動を取り上げ、それぞれの領域における専門的知識と技能を習得し、それらをもとに領域を連携させた活動に取り組む。 活動のテーマ：動く身体に興味を持つ			
▶ 到達目標 1. 造形表現活動における専門的知識と技能の習得 2. 身体表現活動における専門的知識と技能の習得 3. 科目を連携させた総合表現活動の作品の創作と発表			
▶ 授業日計画			
回	主な活動	内容	備考
1	ガイダンス：テーマ説明と**	「できるかな」(E. カール作)に出てくるいろいろな動物の動き経験する	合同
2	造形表現① ダンボールを用いた動物と人物の制作～計画	ダンボール素材について知る 動く仕組み、加工法、道具について知る 人物の制作方法を知る 以上をふまえて制作計画を立てる	2グループ
3	造形表現② ダンボールを用いた動物と人物の制作～制作	計画に基づき作品を制作する	2グループ
4	造形表現③ ダンボールを用いた動物と人物の制作～制作	計画に基づき作品を制作する	2グループ
5	造形表現④ ダンボールを用いた動物と人物の制作～完成と動きの確認	作品を完成させる。 完成品を動かして、動かしやすさや強度を確認する	2グループ
6	身体表現① 手遊び・曲を用いたゲーム、 曲の雰囲気に合わせて動く	身体活動を伴う歌遊びを行う 曲の速さ・高低・歌詞にあわせて動く	2グループ
7	身体表現② 曲に合わせていろいろなものになる 抽象的なものを表現する	曲のテーマに合わせて生き物やものになる 色・母音をグループで表現する	2グループ
8	身体表現③ フォークダンス いろいろなものの動きを表現する	幼児向けフォークダンス、曲の雰囲気を感じて動く、洗濯物・シャボン玉などを表現	2グループ
9	身体表現④ リズムに合わせて動く、ジェスチャーゲーム、オノマトペの表現	太鼓のリズム・音の大きさに合わせて動く、オノマトペの絵本を表現する	2グループ



10	作品づくりに向けて① 動物:ダンボール工作作品、もの（ボール、リボン、新聞紙、わた、プレイクロスのうち一つ）	グループで表現する「もの」の決定、段ボール工作で作成した動物の動きの特徴、表現する「もの」の特徴を考え、動いてみる	合同
11	作品づくりに向けて② 動物、ものを各4分間の作品にまとめる	実際に動きながら計画書に記入する	合同
12	リハーサル 実際に発表する順に受講生を対象に行ってみる	他のグループの作品を鑑賞し、「良かった点」「改善点」などを付箋に記入し、グループごとの台紙に貼る	合同
13	作品の修正	前回の授業でもらったアドバイスをもとに作品を修正する	合同
14	発表	併設幼稚園3歳児を招いて発表会を行い、子どもたちと一緒に表現遊びを楽しむ	合同
15	振り返り	テーマの再確認と振り返り課題の記入	合同
➤ 評価の方法			
受講状況（出席状況・授業への取り組み状況）：50点／個人課題の提出：20点／作品の創作と実施（振り返りの課題も含む）：30点			

物や素材になって動く活動を楽しんだ。

造形表現と身体表現を連携させた総合的な表現活動の学びや今後の課題として、学生への授業後のアンケートから、以下の事柄があがった。

〈総合的な活動としての学びについて〉

- ・作品作りから発表の活動を通して身体表現と造形表現の活動のつながりを感じることができた
- ・物それぞれの動きや特徴について関心を向けることができた

〈子どもの表現を受け止めることについての学びについて〉

- ・子どもと共に活動を行うことで表現活動の意義を実感した
- ・「跳ぶ」だけでも子どもの表現はいろいろあり、子ども達が感じたように表現することが大切だとわかった

〈表現領域を連携させた作品の制作についての学びについて〉

- ・イメージを表すことがこれほど難しいとは思わな



資料 1. 素材の性質を表現する活動の様子

課題としては、完成のイメージを持ちにくかったという学生の感想に見られたが、作例を示したり子どもの事例を示すなどしてイメージを持たせることも一つのやり方ではあるが、より自由な表現活動、作品の制作には、何も無い状態から始めることがそれぞれのイメージや思いを表現することにつながるかもしれない。また学生の動きを引き出すための擬態語などの声かけが必要であり、言葉と共に指導者自身も動くことが豊かな表現活動を引き出すことに繋がると考えられた。

## 2. 2領域を連携させた活動「総合表現Ⅱ」の取り組み

### (1) 授業概要

「音楽表現」と「言葉の表現」を連携させた「総合表現Ⅱ」の授業概要を表2に示す。

### (2) 授業展開と課題

音楽表現と言葉の表現を連携させた活動は「学ぶ・感じる・表現する」をテーマに展開した。音楽表現に関わる活動としては、「ピーターとおおかみ」を鑑賞し、登場人物を表す7つのモチーフにおいて使われた楽器や旋律から物語をイメージし、そのイメージを言葉で表現した。続いて、ピアノ一台で動物や自然・乗り物を表現する活動に取り組んだ後、グループ毎にテーマを設定し発表を行った。言葉の表現に関わる活動としては谷川俊太郎の「赤ちゃん絵本」を取り上げて、赤ちゃんの発する音声に近い音で表現された「言葉の世界」を声に出して一人一人の味わい方を鑑賞しあった。概念に縛られることなく自由に、子どもの身近にある玩具を用いてその動きと音を言葉と重ねて感じる

表 2. 「総合表現Ⅱ」授業計画

▶ 授業の概要 保育現場での子どもの表現活動は、身体・音楽・造形・言語など様々な表現活動が総合的に繰り広げられている。ここでは言語活動と音楽活動を取り上げ、それぞれの領域（表現・言葉）における専門的知識と技能を習得するとともに、2つの領域をクロスさせた美しい日本語の響きを伴った音楽的表現活動の創作に取り組む。		
▶ 到達目標 ・言葉の表現活動における専門的知識と技能の習得及び豊かな感性を身に付ける ・音楽表現活動における専門的知識と技能の習得及び豊かな感性を身に付ける ・科目をクロスさせた総合表現活動の創作・発表をする		
▶ 授業日計画		
回	主な活動 / 話題	備 考 (準備資料)
1	オリエンテーション (シラバス解説・授業内容の説明) 学びはじめのシート	グループ編成とファイル作成
2	各表現領域活動 その1 表現領域「音楽」/表現領域「言葉」	グループ活動記録 個人記録 12グループ
3	各表現領域活動その2 表現領域「音楽」/表現領域「言葉」	グループ活動記録 個人記録 12グループ
4	「音楽」と「言葉」クロス表現活動 中間発表 音・言葉のコラボを味わう 創作表現	グループ活動記録、個人記録 学びの資料
5	各表現領域活動 その3 表現領域「音楽」/表現領域「言葉」	グループ活動記録、個人記録 個人記録 12グループ
6	各表現領域活動 その4 表現領域「音楽」/表現領域「言葉」	グループ活動記録、個人記録 個人記録 12グループ
7	創作活動の取り組み その1 テーマの設定 構想	絵本 楽譜 持ち寄り グループ活動記録、個人記録 学びの資料 4グループ
8	創作活動の取り組み その2 キャスト、必要なもの (楽しむ、味わう)	グループ活動記録、個人記録 学びの資料
9	創作活動の取り組み その3 キャスト、必要なもの (楽しむ、味わう)	グループ活動記録、個人記録 学びの資料
10	創作活動の取り組み その4 (	グループ活動記録、個人記録
11	中間発表 と 反省評価 保育案作成	学びの資料
12	創作活動の取り組み その5 最終リハーサル	プログラム配布
13	創作活動の取り組み その5	反省・評価
14	発表会 (幼児を招いて) 振り返りレポート課題 と 自己評価	脚本提出
15	まとめ わたしの物語作り (今までの資料を綴じる)	ファイルを持参
▶ 課題と評価 グループ活動記録、個人記録、脚本などの課題の取り組みと提出 ・授業での取り組み、役割分担と協力、作品構成や創作活動への意欲・態度などの積極性、幼児理解と作品との関係性、振り返りレポート課題等を総合的に評価する		

ままに表現することを試みた。  
 続いて2領域を連携させて「ことば」と「おと」のコラボレーションでそれぞれの表現で経験したことが活かせる教材として、授業者が選定した絵本「かいじゅうたちのいるところ」「もこもここ」「もりのなか」を取り上げてそこに描かれている世界を表現するグループ活動に取り組み、4歳児を対象として作品を発

表した。  
 これらの活動を通して、授業後のアンケートの中で学生は、「表現の多様性に気づき、音や言葉で表現する楽しさ、自分が感じたままを表現する楽しさを味わうことができた」と述べている。  
 以上、「総合表現Ⅰ」「総合表現Ⅱ」の取り組みをもとに、今後、平成30年度には4領域を重複させた「総



資料 2. 4 歳児を対象にした作品発表の様子

合表現Ⅲ」を計画、実践していく予定である。そこで「総合表現Ⅲ」のパイロット実践として行った平成 27 年度後期短期大学部こども保育学科 2 年次「保育実践演習」での取り組みを次項に挙げることにする。

### 3. 4 領域を重複させた表現活動「保育実践演習」での取り組み

#### (1) 授業概要

前掲のアンケート調査をもとに、「感性」、「領域の総合性理解」の習得を目的とし、4 名の担当教員で授業の内容と展開（全 15 回）を表 3 のように計画した。担当教員の専門領域は音楽表現・声の表現・言葉表現・身体表現である。

第 1 回では授業で取り上げる「総合表現」の活動の目的説明と受講生を 4 グループに編成した。

第 2 回～5 回の授業では、4 グループがローテーションで 4 領域の活動を体験する。各グループの活動を次のように計画した。

- ①音楽領域を専門とする教員は南米発祥の打楽器カホンを使って、叩くことでリズム感を養い、様々な音色を作り出すことで豊かな感性を育むことを活動の

ねらいとした。

- ②声の表現を専門とする教員はオーガンジー生地ของ プレイクロスを用い、手に持ったプレイクロスで空間に絵を描くように身体を大きく動かし、声を伸びやかに発することを活動のねらいとした。
- ③言葉の表現を専門とする教員は、コミュニケーション活動として、信頼する人と応答することの心地よさ、伝える・伝わる喜びに潜む非言語コミュニケーションや言葉の響き（オノマトペ）を体験することをねらいとした。
- ④身体活動を専門とする教員は、伸縮性のあるボディソックスを着用して、バランス感覚やコーディネーション機能を育みながら自由な身体的活動を作り出すことを活動のねらいとした。

第 6・7 回では①～④の 4 領域のうち 2 領域をクロスさせた（組み合わせた）活動の経験ができるよう授業内容を考えた。第 8 回以降は擬態語・擬音語をテーマとした絵本等を取り上げ、総合的な表現活動により絵本のイメージを表現する作品の創作を行い、幼児を対象として発表することを最終的な目標とした。

#### (2) 授業展開と課題

総合 4 領域を連携させた総合表現の取り組みは、平成 27 年度後期の短期大学部 2 年生を対象とした「保育実践演習」の授業で実施した。本科目は幼稚園教員免許・保育士資格取得の為の実習を終了した短期大学保育者養成課程の 2 年生 60 名が履修する、保育者になるに当たっての協同的・実践的な学びを目標とした設定であった。全 15 回の授業すべてを 4 名全員で担当する方式により実施した。表 3 で示した授業計画に

表 3. 授業計画「総合表現の取り組み（保育実践演習）」

回	授業内容			
第 1 回	ガイダンス：授業の目標の説明とグループ分け			
第 2 回 ～第 5 回	各領域の活動の体験			
	① カホン	② プレイクロス	③ オノマトペ	④ ボディソックス
第 6・7 回	①～④より 2 領域をクロスさせた体験			
第 8～10 回	題材（絵本）を取り上げて作品の創作			
第 11 回	授業内中間発表			
第 12・13 回	中間発表を踏まえての改良			
第 14 回	リハーサル			
第 15 回	幼児を対象にした発表と振り返り			



沿って授業を実施するため、毎時ごとに担当教員の打ち合わせを行った。学生の反応や進み具合により修正する必要も生まれ、各教員がアイデアを出し合いながら毎回の授業の進め方を検討した。その結果、実際には表4に示す流れ・内容での授業実施となった。全15回の授業は実施した内容からおよそ3つの段階に分けられる。

1) 第1段階 (全5時間)

最初の5時間を、総合表現への導入および単独領域の表現活動を体験する段階ととらえて実施した。

【第1回】

授業テーマを説明した後、全15回の流れを伝え作品を創作するまでのイメージを捉えさせた。その後、活動するグループを、日常の人間関係やクラス単位とは異なった関係を育むことができるよう、くじにより無作為の15名ずつのグループを編成した。編成後、グループ名決定、毎時終了後の振り返りシート記入担当者決定、さらに振り返りシートを保存するためのグループ用ファイルにメンバー名やイラストを記入して作成し、メンバー同士の連帯感を持てるようにした。

【第2回～第5回】

4名の教員が「カホン」「プレイクロス」「オノマトペ」「ボディソックス」を素材に、声や体をほぐすことを

目的に1時間ずつ各グループを担当した。保育現場への調査で、総合的な表現活動を考える際に造形表現活動との連携が弱いことが明らかとなったことから、これらの4回の授業では、それぞれの領域の活動体験後、その体験をいろいろな素材の紙、画材などを使い、造形表現として表す活動を取り入れることを新たに取り入れた。それぞれの活動終了後、感じたことを絵の具、ローラー、和紙、サインペンなどを用いて1枚の模造紙に表現し、全4回にわたる体験を1枚の模造紙に積み重ねていく方法で、学びの軌跡として確認できるよう工夫した。

2) 第2段階 (全3時間)

各領域での体験をもとに、領域を重複させた活動に取り組む段階を第2段階とした。

【第6回】

第1段階で経験した4つの活動を振り返って各担当教員が活動の様子を写真・映像等も用いて報告し、受講者・教員全員で活動内容を共有した。また、4領域の活動の感想を各自がオノマトペとポーズで表現した。

【第7回】

第6回までの授業の学びについて、授業の経験で感

表4 「総合表現」として実施した授業の実際

	回	テーマ	内容	
第1段階	第1回	ガイダンス	総合表現のねらい説明とグループ分け (1グループ16人で構成)	全1時間
	第2回 ～ 第5回	各領域の活動	「音」(カホン) / 「声と動き」(プレイクロス) / 「ことば」(オノマトペ) / 「からだ」(ボディソックス) に分かれての活動を体験	全4時間
		各領域の活動体験を造形表現として表す	各領域の活動体験後、感じたことを絵の具とローラー、和紙と絵の具、サインペンなどを用いて模造紙に表現する	
第2段階	第6回	第1段階の振り返り	教員による4領域の活動の振り返りと、それぞれの活動の感想を各自がオノマトペとポーズで表現する	全1時間
	第7回	オノマトペ譜の作成	第6回までの経験を学びの履歴としてオノマトペ譜として表す	全1時間
	第8回	2領域をクロスさせた活動	「音」と「声と動き」を重複させた活動を体験する	各0.5時間
「ことば」と「からだ」を重複させた活動を体験する			全1時間	
第3段階	第9回 ～ 第11回	作品の創作	4グループに分かれて題材決定と作品の創作 【絵本『ばびぶべぼ (元永定正作)』もとに】 【しあわせをよぶおんがきたい】 【谷川俊太郎の「ことば」の世界を味わう】 【五感を働かせた表現作品『なみ』】	全3時間
			中間発表	リハーサルとしての中間発表と他グループ作品の鑑賞 気づいたことを付箋に記入し伝える
	第13回	作品の修正	中間発表を元に各グループ作品の修正	全1時間
	第14回	作品発表	4歳児を対象とした作品発表	全1時間
	第15回	振り返り	発表の反省と授業の振り返り	全1時間



じたことを学びの履歴としてカード形式の色画用紙に表した。色・形・擬音語・擬態語などを用いて、各受講生が思い思いの作品を作り、グループメンバー全員の作品を繋げて『オノマトペ譜』（資料3）として表現した。

#### 【第8回】

「音楽」・「声と動き」及び「ことば」・「からだ」の2領域をクラスさせた活動を2グループに分かれて45分ずつ体験した。「音楽」・「声と動き」をクロスさせた活動では、5人組で、1人がカホン担当、4人がブレイクロスを持って表現することにした。表現のテーマは「花火」「水」「風」「火」「雷」「闇夜」「雨」の内、一つを選ばせた。テーマのイメージの色のブレイクロスを選び、音と動きで表現したのだが、多様な声を使うことはなかった。

「ことば」と「からだ」をクロスさせた活動では、谷川俊太郎作の赤ちゃんから絵本「とこてく」「んぐまーま」「にゆるぺろりん」「あーん」「にゆるぺろりん」および絵本「もこもこもこ」とボディソックスやいろいろな素材の布、ボール、身近な幼児用のいす、玩具などを表現が楽しめる環境として保育実習室に整えた。その中で、絵本を観ながら、声を出して読み味わい、体が動き出す、布を敷いて道に見立てて歩き出す、ボールを転がして「ころころ」と声が弾み体が動く、

ボディソックスの縮む・はじけるユーモラスな動きが加わり、多様な動きと言葉の面白さの表現を体験した。

#### 3) 第3段階（全7時間）

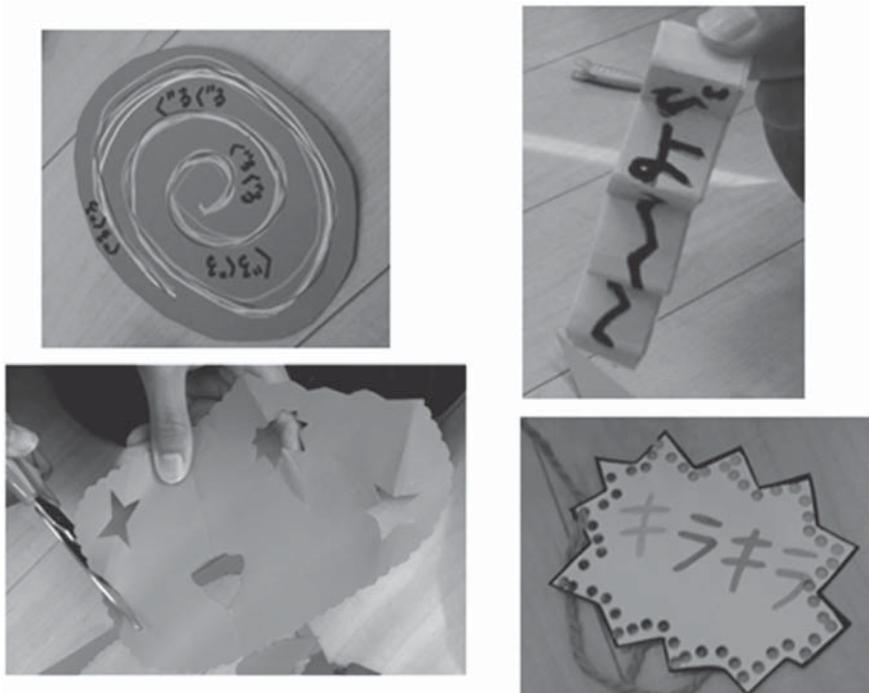
これまでの経験をもとに、総合表現としての作品を創作し、幼児を対象に発表、授業全体の振り返りをする過程を第3段階とした。

#### 【第9回～第11回】

グループごとに、これまでの経験を活かして創作する作品の題材（絵本・楽曲）を決定し創作する活動に3時間を当てた。それぞれの作品の創作に関しては、教員が1名ずつ各グループを担当し、題材の設定や作品の創作についての助言を行った。作品創作に取り上げた絵本・楽曲は各グループ担当教員が提案した事例と、複数提示した中から学生が選択した事例があった。以下にそれぞれのグループの作品創作における3回分の授業と、それに続く発表会までの過程の概要を述べる。

#### 【絵本『ばびぶべぼ（元永定正作）』もとに<sup>注5)</sup>】

絵本『ばびぶべぼ（元永定正作）』を担当教員が提示し、声や五・七・五の語調をボディーパーカッションで表すことから始め、トーンチャイムの響きをた



資料3. オノマトペ譜の作成



資料4. 絵本『ぱびぷべぼ』作品発表の様子

どって、リボンを用いて身体の動きで表すなど、3人一組で絵本の5場面それぞれのページを譜面に見立てて読み、表現として立ち上げた。動き（模倣・ミラー）、音（響きのリレー）、声（声のリレー・高低・大小・長短）などを経験しながら、以下のような段階を経て五七五の語調を生かした作品を作り上げた。

- ① 15人全員で表現する。パピプペボの声での呼びかけ、ボディーパーカッションで五七五のリズムを表現する。3人組で表現（5場面続けて行う）する。
- ② 中間発表において客観的に見直し、討論を交わして改良する。
- ③ 中間発表で受講生が感じた迷いとして、「子どもは楽しんでくれるだろうか」、「ストーリーにして構成をはっきりさせたほうがわかりやすいのでは」、「子どもたちと楽しめる表現にしたい」、「一から練り直したい」などが上がり、担当教員より「5場面それぞれのイメージの表現ができている、響きを聴き切ることができている、ゆっくりとそれぞれのイメージへ誘われる」の助言を行い、発表に向けての自主的な活動もみられた。

【しあわせをよぶおんがくたい】

ピアノ曲〈土人のおどり〉（中田喜直作曲）と〈道化師〉（カバレフスキー作曲）から得たイメージを、楽器（カホン・ピアノ・フルート・ビブラスラップ・ロリポップ等）や身体、小道具（ピエロの鼻、サンタクロースの衣装、バルーンアート等）を使って表現す



資料5. 「しあわせをよぶおんがくたい」作品発表の様子

る作品創りに取り組んだ。従来の「ステージと観客」という発表スタイルに囚われずに教室全体をステージとすることで、表現者（学生）と観客（子どもたち）が直接交流でき、楽しさを共有できた。同時に、楽器や小道具に依存しすぎて合奏に終わることがないよう表現を工夫することが課題となった。

- ① 15人が2グループに分かれて、担当する楽曲のアーティキュレーション、フレーズ、曲の構成、同じリズムによる長調と短調の表現の差を感じ取って、それをいかに音や身体で表現するかを話し合った。
- ② 話し合いに基づき、使用する楽器や小道具を試行錯誤しながら決定し、作品の構成を考えた。
- ③ 中間発表で、観客の中に入って行って楽器に触れてもらう試みが成功したため、子どもたちも参加できるボディーパーカッションを新たに取り入れ、教室全体をステージとした。

【谷川俊太郎の「ことば」の世界を味わう】<sup>注6)</sup>

絵本『もこもこもこ』（谷川俊太郎作、元永定正絵）を担当教員が取り上げ、15場面を5場面ごとに1グループ5名で分担して、個々の主体性が発揮できるように創作に取り組んだ。『もこもこもこ』はオノマトベ（擬音語・擬態語）と、単純な形と鮮やかな色彩の絵本である。オノマトベは、感じ方によってその表現や意味の受け取り方が微妙に違って来る。そこに注目してこの絵本を取り挙げた。今までの経験を活かして、絵や形や色彩、ことばのリズムからイメージする素材



資料6. 絵本『もこもここ』作品制作の様子

やおもちゃ・楽器（グロッケン、クラッカー等）に加えてボディソックスを選択しつつ工夫を積み重ねて創作を試みた。「触れる・感じる・さぐる」などいろいろな味わうスタイルを工夫し、「ことば」・「からだ」・「音」・「響き（声）」の世界のコラボレーションを楽しみ味わう作品を以下のような過程を経て創り上げた。

① シーンに分かれて取り組む。

「もぐもぐ」のシーンのこだわり、「もこもこ」のシーンをどう動くのか、絵と言葉（オノマトペ）から受け取るイメージに近い素材を選び、創作過程の中で表現が共有されつつ淘汰されていく。

② 中間発表を経験することによりシーンのつながりができていないことに対する気づきから課題を発見する。

③ 本番間際になって、表現にこだわり始める真剣さがみられ、子どもの姿に接して表現する心情・意欲・態度が高揚する。

創作過程から、絵本と出会い困惑・試行錯誤・協力・表現の多様性の気づき・喜びという学びの過程がみられた。

【五感を働かせた表現作品『なみ』】

担当教員が提示した複数の絵本のうち、グループメンバー全員が字のない絵本『なみ』（S. リー作）を取り上げて作品を創作することを希望した。寄せては返す波の様子を、波の音・鳥の声などを工夫しながら、からだと布・シートなどの素材を使って表現する創作に取り組んだ。具体的な表現対象としての波のイメージについて話し合いを重ねて共有し、表現することが課題となった。

- ① 絵本「なみ」の何を表現したいのか、子ども達に感じて欲しいものは何かについて話し合い、そのためにはどのような表現が適切であるかについて検討した。また、絵本のどんななみを表現したページを取り上げるのかについても話し合いを重ね決定した。
- ② 役割決めと道具の準備をする。いろいろな種類の波を布、ブルーシート、すずらんテープなどを用いてどのように動くかについて話し合い、動きと音について実際に試行しながら改良した。
- ③ 様々な種類の波の音を表現するにはどのような「音」が適切かについて話し合った。ビニール袋に米や小豆を入れる、ビニール傘とビーズ、ざると小豆など、音探しに力を入れた。



資料7. 絵本『なみ』作品発表の様子

以上、各グループの創作と発表に至る過程をあげた。12回目以降は、グループ活動を行いながら、全体授業も下記のように進めた。

【第12回】

4時間分をかけて各グループが創作した作品は未完成ではあったが、中間発表として受講生同士で鑑賞する機会を設定した。準備・練習がまだまだ不足しているなどの課題を認識するのに良い機会となった。他グループの作品を鑑賞して、もっとも印象に残った作品へのアドバイスを付箋に記入し、良い点、改善点がそれぞれのグループに伝わるようにした。

【第13回】

前回の中間発表、他の受講生からのアドバイス等をもとに、作品の改良に取り組んだ。自主的な練習の必要性を受講生自らが認識し、取り組んだグループも見られた。



## 【第14回】

本学併設幼稚園の4歳児を対象として4グループが作品を発表した。プログラムを代表学生が幼稚園に持参し、事前に幼稚園のクラス担任より説明を受けた園児が2グループに分かれ、2作品ずつを鑑賞した。

## 【第15回】

まとめの活動として、子どもを対象に発表した各グループ作品の映像を鑑賞した後、授業全体を振り返り、「各自が取り組んだ作品について」および「総合表現で学んだこと」について振り返りシートに記入した。

## V 考察

2領域、4領域を連携させたクロスカリキュラムによる総合表現の活動の実践を振り返り、学生の学びについて検討した。

まず、総合表現活動を実施する前提として、学生の感性を育み現場で活用できる表現技法の習得が必要となる。具体例としては、それぞれの表現領域にかかわる身近な素材を用いた様々な表現の経験、領域を重複させたモチーフの活動を経験、絵本を題材にしたグループでの創作活動への取り組み、他者の自由な発想に触れることによりさらなる教材発展のヒントを得ること等をあげることができる。そして、クロスカリキュラムでの総合表現活動を実施するには、どのような領域の活動をどのように重複させるのか、その内容の吟味が必要であり、完成形や予定プログラムのない試行錯誤しながらの表現の意外性を体験しながらの総合表現の創作過程が実際の授業展開となる。従来の、領域別表現活動の計画性に基づいた授業構成とは非常に異なる点であり、このことは、保育現場の保育における表現活動の保育計画・実践過程の考えに非常に隣接するものである。これらを経験する学びの過程の中で、学生からは、ことば以外で表現することの難しさ、表現の多様性、自分自身の視野の広がり、表現のバリエーションの増加、体で感じることの大切さなどが気づきとしてあがった。一方で、成果を具象化し検討材料とするための工夫も必要となる。創作表現によって得た心情をオノマトペとして表したり、自らの創作表現を対象化し子どもの心情に訴えるものとなっているのかを確認し作品の改良・修正作業を重ねたり、自身の活動を振り返って確認する活動が重要と

なる。これらを通して学生相互で表現を見合い、ともに創作することを重ねて自らが表現者となっていくと考えられた。

担当教員は基本的な専門知識・技能を養成校学生に習得させつつ、単独の表現活動にとどまることなく子どもの自由で総合的な表現に寄り添い、それらを受け止めることのできる保育者養成に努めなければならない。各表現領域の個々の基本的な表現技能の可能性を探り、それらの技能を修得しつつ、それらを活かした関連付けが必要となる。つまり、各領域の専門性に重点を置きつつ、横断的に連携させた活動を検討することが今後、保育者養成教育に求められるであろう。その際には、複数の教員での協同的な授業開発への取り組みが不可欠である。

そして保育者としての感性を育むためには、日常生活場面に即したふとした気づきや同じことを視点をずらしてとらえて比較的簡単な技能を用いて楽しむ心の余裕などが必要となる。養成校教員はそれぞれの専門性を尊重し合い、身の回りの素材から表現の可能性を見出すことで教材の組み合わせの可能性が拡大していくであろう。また、総合的な表現活動を引き出すことの難しさが指導に当たった教員の課題としてあげられる。指導者としての的確な言葉での表現の承認や、指導者自身の感性を磨くことでより多様な学生の動きを引き出すことにつながっていくと思われる。加えて十分な教員間の打ち合わせの時間の確保も必要であろう。

## VI 総括と今後の展望

これまでは保育内容「表現」系科目がそれぞれの専門領域ごとの活動になることが常であった。これはそれぞれの分野での技能習得を効率的に行える反面、保育者養成校学生が柔軟な取り組みを行うことの支障となっていたのではないだろうか。保育者を目指す学生の感性を育み、総合的な表現力を養うためには別の形式の表現の授業があるのではないかと考え、クロスカリキュラムを用いて定式化されていない新しい授業形態を模索してきた。比較的簡単な課題を組み合わせながら試行錯誤を繰り返すことで様々な異なる表現要素の面白さを引き出すことを経験することは、完成度の高い作品を創作・上演することよりも学生たちの気



づきや創造的な活動を引き出しやすいのではないかと考え、これまでの各表現領域の授業科目を超えた枠組みでの活動を学生に体験させることを試みたのである。

今日の多様な保育ニーズに対応できるよう、保育内容、保育者の質の充実が重要になってきており、幼稚園教諭・保育士には各種の領域の専門的な知識・技能は言うまでもなく、多領域にわたる総合的な実践力が求められている。保育活動を様々に展開できる実践力を備えた保育者を養成するために各科目の専門性に重点を置きつつ、養成校での科目を横断的に連携させたクロスカリキュラムでの活動を実践することは、保育における総合的な実践力養成の観点から重要である。中でも表現領域にかかわっては、子ども一人ひとりの思いを受けとめ感性豊かな表現活動に発展させることができるよう、単独の領域だけでなく複数の領域にわたる総合的な表現能力の習得がますます重要となるであろう。今後も既存の枠組みが存在する養成校カリキュラムの中で実現可能な方法で感性を育むことのできるような授業開発に取り組んでいきたい。

## 付記

\*本稿で報告したアンケート調査及び授業実施のため一部の教材の購入などは文部科学省科学研究費補助金〈基盤研究(c) 26381297(平成26年度～平成28年度)〉の助成を得て実施した。また、本稿は平成29年度3月に発行した「科学研究費研究成果報告書『保育者養成における領域“表現”へのクロスカリキュラム導入に関する検討』の内容及び、日本保育学会第70回大会ポスター発表「保育者養成における領域『表現』へのクロスカリキュラム導入に関する検討」(平成29年6月、於：川崎医療大学)の内容を整理し、加筆したものである。

## 注

- 1) 智原江美・鍋島恵美・和田幸子・下口美帆・田中慈子,「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成のあり方—京都府南部の幼稚園・保育所へのアンケート調査からの検討—」『京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学

部研究紀要』第53号2015年12月, pp.119-134

- 2) 智原江美・鍋島恵美・和田幸子・田中慈子「アンケート調査からみた保育者養成校における総合的な表現活動に関する授業の実施状況」『京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第54号2016年12月, pp.197-208
- 3) 智原江美・鍋島恵美・和田幸子・下口美帆・田中慈子「クロスカリキュラムを用いた保育内容「表現」の授業展開に関する試案」として授業試案を全国保育士養成協議会第54回研究大会(2015年9月23日)において、また智原江美・鍋島恵美・和田幸子・田中慈子「クロスカリキュラムを用いた保育内容『表現』の授業開発」として授業実践研究を日本保育学会第69回大会(2016年5月7日)において発表した。
- 4) 造形表現分野は下口美帆教員が担当した。
- 5) その詳細は、和田幸子「保育総合表現のこころみ—絵本『ばびぶべぼ』を題材にしたグループ活動の考察—」『関西楽理研究』33号2016年11月, pp.165-183において報告している。
- 6) その詳細は、鍋島恵美「保育者に求められる『感性』を育む授業の試み—擬音語・擬態語の表現に注目して—」『京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要』第54号2016年12月, pp.209-226において報告している。